

〔論文〕

ウガリトと旧約聖書

津村 俊夫

旧約聖書の背景としての「カナン」、即ち古代シリア・パレスチナの文化・宗教事情は、一九二九年以来のウガリト文書の発掘によって、今や一段と明確になって来ている^①。それ以前は、教会史家エウセビウスが引用している所の、ピュブロスのフィロによるフェニキア神話^②とか、旧約聖書の預言者が間接的に言及している記述によって、主として知られる程度であった。しかし、ウガリト文書によって、今や我々は、カナンの宗教・文化に関する豊かな第一次資料を手に入れているのである^③。そして、旧約聖書やフィロの伝えるフェニキアの神々が、大体において、ウガリト及び他のカナンの資料に現れているところの、なじみ深い神々の名称を有していることも明らかとなった^④。

では、ウガリトは「カナン」と如何なる関係にあったのであろうか。紀元前十四世紀のアマルナ文書には「カナン」という名前が現れているし、最近、ウガリト文書にもその名が出てくることが確認されている^⑤。更にマリ文書にも「カナン人」(複数)が言及されているのである^⑥。しかしながら、アマルナ文書(一五一・四九一六八)によると、ウガリトはカナンに属していないし、「カナン人」は、ウガリトの文書において他の諸外国人と同じように扱われている。レイニー(Rainey)による^⑦「ウガリトの市民(sons of Ugarit)」と「カナンの住民(sons of Canaan)」との国際的

取引の存在を記している文書も発見されているという^①。このことは、「ウガリト」という都市国家と「カナン」の地」が互いに区別される政治的、実体的であったことを示していると言える。

政治の分野だけでなく、言語の点においても、ウガリト語が、従来のように「カナン語の一種で、ヘブル語と同系に属する方言」と簡単に考えることが出来なくなっている。ゴードン (C. H. Gordon) は、ウガリト語と、アマルナ文書に表われているカナン語方言との間に、著しい相違を認めている^②。他方、オールブライト及びダフドは、ウガリト語をカナン語の一つ——前者によれば北カナン語——と考え続けている。しかしながら、現時点においては、ウガリト語は、マリ文書に表れているアモル語や、ヘブル語及びフェニキア語等のカナン語とともに、北西セム語に属すると考える方が、より正確であると言えよう。したがってウガリトが、どの程度にまで「カナン」の地」の一部であると考えられたか、厳密には明らかではない。ただ、「カナン」が、我々が知りうる限りにおいては、国家的単位を意味したことは決してなかったということは確かである^③。

以上を意識しつつ、ここでの「カナン」という表現を、広義の意に、即ちパレスチナ、フェニキア、及びシリアのすべてを含むと考える事にする。その主なる理由は、これらの地域の文明は、中期—末期青銅器時代においては、相当質な (homogeneous) ものであったと思われるからである^④。特に、紀元前一七〇〇—一二〇〇においては、北のウガリトから南パレスチナに至るまで、又、海から砂漠に至る地域にわたって驚く程一様 (uniform) の物質文明が栄えていた。又、北西セム人の人名には、著しい類似点が存在し、彼らの言語も互いに似ており、高度に発展した文化が存在していたことがわかっている。ゴードンの言葉を借りると、古代オリエントは一つの “ecumene” (普遍的社會) を形成していたのである。自由に動くことのできるギルドの存在によって例証されるように、種々の技術 (音楽、医療、建築、宗教儀式) をもった各ギルドのメンバーが政治的国境を越えて、他文化と交流した事などは重要

な歴史的事実である^⑤。

又、「カナン」の地は、地理的にも、南のエジプト、東のメソポタミア、北のヒッタイトとの中心にあたり、通商や政治的侵略のための主要なクロス・ロード (cross-road) に位置している。西の地中海に向っては、ウガリトをはじめ、少し後代のビュブロス、ツロ、シドン等の良港にめぐまれ、海洋活動も栄えていた。更に、ウガリト出土の文書の中に、四か国語 (シメール語、アッカド語、フルリ語及びウガリト語) による語集 (粘土板^⑥) が存在したり、ウガリト社会に、ヒッタイト人、フルリ人、アラシヤ (キプロス) 人その他の諸外国人が属していた事が判明している。これらは、ウガリトの都市国家がいかに国際的雰囲気に含まれていたかを示している^⑦。

ウガリトが「カナン」に共通の文化・言語をもっているだけでなく、宗教においても本質的に同一のものであると言えよう。ウガリト文書を通して知り得る宗教・文化は、我々が旧約聖書との関係において扱わんとする「カナン」文化・宗教」と本質的に同じであると同提することが妥当である。ただ、時代が進むにつれて、フェニキア人の神々の役割等が変化してきたりはしているけれども。

ウガリト文書により、当時の日常生活について詳しく知ろうとする時、限界もある。例えば、文学文書は必ずしも一般の生活の座を反映してはいないであろうし、行政文書の多くは相当の背後の情報を前提にして書かれているからである。ウガリトからは、未だかつて、法典なるものは出土していないし、我々の手もとにある文書は、ほとんど宮殿の公文書保有所 (archives) か図書館からのもので、マジ文書に見られるような、個人の家庭・日常生活についての記述に欠けている。以上の限界を意識しつつ、以下にウガリト文書そのものと、旧約聖書との関係に触れて行く。

ウガリトの文学文書は大きく分けると、神話と叙事詩となる。前者の重要な関心事は、言うまでもなく、豊穡多

産ということである。例えば、パール神とその妻・妹であるアナト女神を中心としたパール・サイクルの中心主題は、

パール(多産と生命の神)とモート(不毛と死の神)との戦い——theomarchy——であるが、その戦いの結果が、その土地の長期の豊穡多産又は不毛のいずれかを決定するという。そのための儀式は、神話の内容、即ち豊穡多産の良き神々が彼らの敵を打ち破ることによって多産をその土地(社会)にもたらしめること、のために重要なもので、その国の将来を運命づけられるものと考えられた。ウガリト文書のUT 52においては、「良き神々」(im nm)が豊穡多産をもたらす約束の子らとして記されており、儀式の部分にて「死と悪」(nt-ws)の神が段階的に滅ぼされていく過程が言及されている。更に興味ある事柄は、ウガリト語で「滅ぼす」、「殺す」、「打ち破る」等の語を分類してみると、ほとんどすべての場合、これらの動詞の行為者(agent)が、パール又はアナトの神々であるという事である。そのことは、豊穡多産の神々に敵対するものはいかなる神々であれ、「滅ぼされるべき」ものであり、ウガリト社会の繁栄のためには不可欠の必要条件であるという信仰を裏づけていると思われる。

更に、ウガリト文献において、「良い」という概念は、アッカド語及びヘブル語に共通のtabu/tobではなく、nmという語によって表現されていることに注目したい。ヘブル語テキストには、tobとnmの両者が用いられているが、一般に、善悪の概念を表すには前者が用いられるのが普通である。他方、ウガリト文献では、フェニキア語におけるごとく、nmが「良い」という意を表す普通の語である。nmは、パール神の形容辞(epithet)として、又、彼の住家や「雨」と関係づけられて現れている。又、nmは音楽活動のコンテキストにおいて、「良い声」とか「調和のとれた」という意味で用いられている。nm「良き者」という名称は、アカットやケレト等の英雄たちに使用されている。更に、ウガリト社会における豊穡多産のモチーフにおいてたびたび用いられ、悪の神々——即ち、不毛と死の神々——に敵対するものがnmとされるのである。このように、ウガリトにおいて「良い」という概念は、豊かな繁

榮そのものと密接につながっており、「良き」神であるべきはずのパール神が、「むさぼり」を起し、又、女神アナトが英雄を殺害する等の例からも見られるごとく、その善悪の観念は、全く「非道徳」(amoral)——そして、これは不道徳行為として表れている——な性質のものであることがわかる。換言すれば、完全な物質主義のシンボルがnmという語であったとも言えよう。以上の光に照らして考えると、旧約聖書において「善」の概念が、nmではなく、tobによって表現され、ヘブル語のnmは、あくまでも「音楽」、「英雄」等との関係で使われていることは、amoralな「カナン」の社会の価値観と意識的に区別するためであると言えるかも知れない。

ウガリトの神々の「貪欲さ」及び「不道徳行為——汚れ——」を知る時、旧約の律法がなぜ「むさぼり」を禁じ、カナンの宗教に対して意識的な反発を示しているかがいっそう明確になる。例えば、ウガリトにおいて、動物と性関係を持つことは、パール神が若い雌牛と関係する記事から類推されるごとく、決して犯罪行為としてはとらえられてはいなかったようである。これに反し、旧約聖書は、こうした事を「道ならぬこと」(レビ一八・二三)として厳重に斥けており、しかも死罪にあたるものとするのである。「わたしがあなたがたの前から追い出そうとしている国々は、これらのすべてのことよって汚れておる」と主なる神は言われるのである。更に、そのこと自体、不道徳で「汚れた」行為に見えなくても、禁止されている例がある。出エジプト記二三・一九の「子やぎを、その母親の乳で煮てはならない」という禁止項目は、「ミルクで子やぎを料理する」というウガリトの儀式行為——豊穡多産の祭儀における——に対する意識的反発と思われる。又、ある儀式にて「はちみつ」をささげることが禁じている項目(レビ二二・一二)も、その行為の背後にあるカナンの慣習に対する「反論」として理解され得る。しかし、こうした禁止項目は、聖書の、カナンの宗教に対する単なる敵対行為というよりも、むしろ、二つの宗教・文化における価値観の全き対立として、より正しくとらえられよう。

しかしながら、ウガリトとヘブルの両語に共通の語いを調べてみると、その中に宗教用語が多く認められる事は注目すべき事柄である。例えば、「犠牲」という語は、ウガリト語では *qrb* で、ヘブル語では *qrb* であるし、ウガリト語の *šmm* は、*レビ記三・一*に「和解のいけにえ」(*šmym*)として出てくる。それらのいけにえは、両方の社会において、「傷のないもの」でなければならなかった。このように、モーセ律法の犠牲に関する語のうち多くが、ウガリト文書にも現われているわけである。この事は、イスラエルの犠牲の「システム」はモーセ律法の一部を占めるものとして編纂されたけれども、その起源は、もっと以前にまでさかのぼることを示している。即ち、ウガリト文書は、これらの「犠牲のシステム」の古さを例証していると言える。

しかしながら、これらの類似は、モーセがウガリトより「借用」したと言う事を示しているのではない。むしろ、両者に共通の要素は、カナンにおける「礼拝行為」に関する「共通の伝統」にまでさかのぼれることを意味している。別の例をあげるならば、*サムラビ法典*の「目には目を、歯には歯を」——*lex talionis*——とモーセ律法との関係は、決して後者が、時代的により古い前者に負っているというわけではない。メソポタミアの法伝統をサムラビ以前にたどって行くと、より古い所の、*シュメール語*の「ウルナム法典」及びバビロニアの「エシュヌナの法典」(前二八五〇)において、他人の身体を傷つけた場合、金で代償することが命じられているのである。野蛮的に見える *lex talionis* は、バビロニアにおいては、むしろ新しい要素であり、おそらくは、当時マリを中心にして栄えていたアモリ人の古い伝統に負うものであらうと考えられる。したがって、*旧約聖書*とサムラビ法典に共通の主題は、各々、より古い「共通の伝統」にまでさかのぼってとらえられなければならない事を示していると言える。

次に、同じく「借用」の問題を、別の例から考えてみよう。前世紀半ば以来、*創世記一・二*の「淵」(*thwm*)とバビロニアの「創造」神話エヌマ・エリシュに出て来る女神 *Tiamat* (ティアマット) 塩水の女神)とが比べられて来た。今なお多くの学者が、このテホームという語は、ティアマットの名残りであり、*創世記一章*はエヌマ・エリシュを「借用」して「変形」したのであるという説をとっている。しかし、*Tiamat* という語は女性形であり、形態論上からは、*thwm* が *Tiamat* から派生したとは言えない。ハイデルは、^⑧両語は共に、それらより以前の共通語にまでさかのぼって考察されるべきである事を主張した。ウガリト文獻に *tm* なる語が認められるという事実は、それを支持するものである。即ち、*創世記一・二*の *thwm* と *Tiamat* とを比べる事自体、前世紀の汎バビロニア主義の誤った立場を受け継ぐもので、*thwm* はむしろ、ヘブル語により近いところのウガリト語の *tm* と比較される必要がある。類似点は「借用」のゆえではなく、「セム語における共通語又は共通の表現法」に従っているからであるというべきであらう。

ここで、ウガリト語とヘブル語とが共に「北西セム語」に属するという事実のゆえに、ウガリト学が旧約聖書の解明に光を与えて来た幾つかの例に注目したい。まず、ヘブル語の用語の意味が、ウガリト語の知識によって、より明確にされたことである。例えば、解釈の難解なところ (*crux interpretatum*) とされて来た箴言二六・二三 *ksp sygym* (MT) は、「銀の上薬」と訳されているが、文法的には説明不可能である。ギンスバーグは、*マンラ本文*を *k spsgym* と区切って、ウガリト語の *spsg* (うわ薬、つや出し) ^⑨によって、その個所を“like glaze”と訳している。このように、子音本文をそのまま保持した上で、母音記号を少し換えることによって、ウガリト語の光から、より良い説明が——少なくとも一つの有力な可能性として——与えられていると言える。更に、*旧約聖書*において、「むしろの木」(＝常緑樹)と訳されている、*ym* という語は、ウガリト語の *ym* (六〇七・六四一六五、六一三・二九) ^⑩ “*tamarisk*”によれば、むしろ落葉樹の一種で「ぎょりゅう」と訳される必要があると思われる。又 *dm·šm* (創世記四九・一一) は、「ぎどろの血」と直訳するより、むしろウガリト語より「赤ぎどろ酒」(*dm·šm*)と表現する

のが適切ではないだろうか。その他、ウガリト語の貢献として重要なことは、ヘブル語の語意を、今まで以上に広いコンテクストに置いて理解できるようになって来ている事である。例えば、ヘブル語の *bnwt* は「高き所」(エゼキエル一六・二四他) という意味の他、「背中」という意味をも有している——例えば、申命記三三・二九——事が、ウガリト語 *bnt* によって確認されたことである。

次に、ウガリト語の光により、ヘブル語文法がより明確になったという事があげられよう。最も顕著な例は、前置詞の *l* (“to”) 及び *b* (“in”) が、共に “from” という意味を持っているという事実である。例えば、詩篇一九・一〇は「主は大洪水のときに、御座に着かれた」と訳すよりも、「大洪水(の時)から」(*mbwl*) と訳す方が適切と思われる。又、ヨシュア記三・一六の「アダムのところへ」(*bdm*) の *b* という前置詞は *Qre* の *ndm* から支持されるごとく、「から」と訳されるべきではないだろうか。同じく、詩篇一八・一四(二三)は、「主は天に」(*bsmyn*) 雷鳴を響かせ」と訳されているが、並行箇所であるサムエル記第二二・一四によれば *mn-smyn* 「天から」である故、前置詞 *b* はここでも “from” の意を持つと考えるのが妥当であろう。更に、ウガリト語の詩文における接続詞 w (通常 “and”) が、しばしば冗言法的 (Pleonastic) に用いられているが、この用法がアモス書三・一一のヘブル語テキストにも表れていると思われる。新改訳聖書は、その *waw* の特異性を意識して、「敵だ。この国を取り囲んでいる」と訳しているが、むしろ「敵が、この国を……」をとる方が——pleonastic *waw* として——適切ではないだろうか。又、ヘブル語の従来の文法においては、 w (construct + genitive) 関係にある二つの名詞の間には、何もかも介入しえないはずではあったが、ウガリト語の光によって、コンストラクト形の名詞が、エンクリティック・メーム (*enclitic mem*) をとる場合が可能であることがはっきりした。例えば、従来の考え方は *hnhlym 'rwn* 「ブルノンの谷川」(民数記二二・一四) は、当然 *hnhly 'rwn* でなければならないはずであるが、*hnhly + m* (コンストラク

トの名詞 + エンクリティック) と考えることが可能である事が判明している。以上は、ウガリト語文法の光によって、ヘブル語の文法がより正確にされた数多くの例のうちの一部である。

更に、詩形論において、ウガリトの詩とヘブルの詩とは、まさに同質のスタイルを有していると言える。一般にセム語の詩は、押韻、韻律よりも、並行法 (パラリズム) の現象の方が主なる特長であるが、ウガリトとヘブルの両文学は、この現象を共有している。又、両者の間には、共通する「固定した一对の同義語」(*fixed pair of synonyms*)——カーストはこれを “correlated synonyms” と呼ぶ——が存在し、両文学の近似性を特に顕著に示しているものである。例えば、「地」(*ars*) と「もり」(*pr*) 「永久に」(*lm*) と「幾世代も」(*dr dr*) 等の一对の同義語は、ウガリトとヘブルの両文学に共通のものである。一九七二年に出版された *Ras Shamra Parallel I* において、ダフドは、約六百近くの「固定したパラレル・ペア」を列挙している。

又、並行法における「数」のクライマックス的用法は、ウガリトとヘブルの両文学に共通のものである。例えば、ウガリト文献にて、 $\text{w} \times \text{w} \times \text{w}$ の並行法はひんばんに用いられているものであるが、アモス書一章にても “ $\text{w} \times \text{w} \times \text{w}$ ” というパラリズムが用いられている。しかし、この事自体は、イスラエルがウガリトの文学形式を直接借りたのである。カーストの言葉を借りると、「ヘブル文学は、イスラエルの民が誕生する以前からすでにカナン語を話す民族の間で形成されていた所の、『カナンの文学的伝統』の後継者なのである」。これらの事実は、ウガリト文学とヘブル文学に共通しているところの、隠喩 (*metaphor*)、直喩 (*simile*)、固定した一对の同義語 (*correlated synonyms*)、ぎまわり文句 (*stereotyped attributives & terms*)、ぎまわり句 (*stereotyped formulas*) とか反復 (*repetition*) 等の現象によって更に支持されよう。

以上のごとく、ウガリトとヘブルの両文学は、二、三の詳細な点に限らず、単語、慣用語、修辭法等の全分野にわたって共通の遺産を受け継いでいるのである。即ち、形式 (Form) に関する限り、両文学は、「一本の木」の二つの異なる枝」でしかないと言えよう。しかし、旧約聖書のオリジナリティーは、そのコンテンツ (内容) とスピリットのうちに見出され得る——その形式は、古代カナン文学の継承しているものであるが——のである。

更に、聖書の著者たちが、ウガリト文書の内容に通じていたという事には、確かな裏付けがある。エゼキエル書一四・一四及び一六には、「ノア、ダニエル、及びヨブ」の三人が言及されている。彼らは皆、破局の事態を克服して来た昔の英雄たちとして扱われている。第二番目のダニエルは、ダニエル書の英雄と同一視するには時代的ながらあり、むしろウガリトのダニエル叙事詩 (又は、アカット叙事詩) の彼であり、ノアとヨブと並び得る昔の英雄であるとするのが妥当であろう。このことは、ウガリト叙事詩の英雄とそれにまつわる物語の内容が、族長時代から捕囚時代に至るヘブル人たちに知られていたという事態を示していると言えよう。このように、イスラエルの民は、昔のカナンの文学的・文化的伝統に詳しく通じており、それらを正しく理解して受けとめていたはずである。カウフマンが、イスラエルは、自らを取り囲んでいる諸宗教を全く誤解 (misunderstanding) していたと説明するのは、正しくない。イスラエルの預言者はじめ、「主」に忠実な者達は、カナンの宗教・文化の内容を正しく受けとめ、それらの不道徳的行為に対して積極的に反論していったのである。詩篇八二篇は、カナンの神々が「ヤハウェ」の前に全く無力・無能でしかなく詩的に表現し、彼らの宗教に論駁している良き例であると言える。

又、旧約聖書の詩人が、ウガリト神話に出てくる「レビヤタン」(Linn) とか「七つの頭をもつ、ねじれた蛇」、「巨獣」(Tinn) 等の名前に触れている事は、彼らが確かにカナンの神話についての知識を持っていたという事実を示すものである。イザヤ書二七・一において、「逃げ惑う蛇レビヤタン、曲がりくねる蛇レビヤタン、海にいる竜」と記述され、

詩篇七四・一三、一四にては、「あなたは……海の巨獣の頭を砕かれました。……レビヤタンの頭を打ち砕き……」

と表現されている。これらの箇所は、多くの学者によって、「神話が歴史化」されたものであると説明され、イスラエルはカナンの自然神話を「借用」して、自らの信仰に即してそれらを「変形」したのであるとされて来た。しかしながら、イスラエルの詩人にとって、カナンの神話の物語を変形したりする必要はなかったはずである。彼らが絶えず直面してきた「現実」(reality) は、天地の創造者なる「ヤハウェ」の神ご自身であり、歴史を通して働き行なわれるだけでなく、大自然そのものを創造し保持しておられる大能者の御手を認めて来たのである。イザヤ書の箇所にては、終末のコンテクストにおいて、詩篇七四篇にては、出エジプトという出来事を背景として、カナン神話の語句を、詩的表現の手段として利用したのであり、表現を生き生きとさせるための技巧と考えるのが妥当であろう。聖書の中には、神話の物語そのものが表記されていないし、それらの語句、即ち「レビヤタン」、「ラハブ」等は、詩文以外の所には全然認められないのである。更に、旧約聖書全体を通じて、いわゆる神話の二大特長であるところの「神の誕生」(theogony) 及び「神々の戦い」(theomachy) のモチーフは全く認められない。カナンの神話に出現する語句が断片的に聖書に現れているからと言って、旧約聖書の記述の背後に「神話」——即ち、人間のリアリティー理解の物語——が存在し、その著者が「神話」を「借用」し「変形」したと説明する必要はない。ここで我々に必要なことは、正しい釈義であって、それらの「神話的」語句をもって「何が」詩的に語られているのであるかを問うことであると思われる。更に、人間が自らの現実をとらえようとした努力の結果生れ出た物語と、神の自己啓示としての聖書的事実との間を、常に正しく区別する必要がある事をも忘れてはならない事実であろう。

カナンの文化・宗教を、ウガリトと旧約聖書との関係を中心に概観して来た。最後に、列王記第一、一九章に注目したい。イスラエルの預言者エリヤが、バアル——フェニキアのツロの神メルカルト——の預言者達と対決し、ヤハ

ウエこそ真の神であることを示し、彼らを滅ぼした直後のことである。フェニキア人のイゼベル——イスラエルの王アハブの妻——を恐れて、神の山ホレブにやって来たエリヤは、そこで主の声を聞く。しかし主は、カナンの自然宗教の主題たるところの風、地震、火の中にはおられなかった。バアルの宗教——物質主義、非道徳な偶像崇拜——のまったただなかで、主は、細き静かな声で語られた。「エリヤよ、ここで何をしているのか。……わたしは、バアルにひざをかめなかった者を、イスラエルの中に七千人残しておく。」これらの主の言葉は、現代の物質主義の嵐の吹きすさぶ中で、我々主を信じる者に与えられる静かな確信であり、チャレンジでもある。我々は、聖書の光に照らされた「現実」を正しくとらえ続けなければならないのである。

注

① 簡単な入門書としては

Charles F. Pfeiffer, *Ras Shamra and the Bible*. "Baker Studies in Biblical Archaeology." Grand Rapids: Baker Book House, 1962 が最も。その他 Cyrus H. Gordon, *Common Background of Greek and Hebrew Civilizations*. New York: W.W. Norton, 1962, 1965 [邦訳『聖書以前』(みすず書房)あり] Arvad S. Kapelrud, *The Ras Shamra Discoveries and the Old Testament*. Norman: University of Oklahoma Press, 1963. 等がある。日本語文献としては、サイラス・H・ゴードン「古代オリエントに於けるウガリットの重要性」、『オリエント』一九七四年号、一頁以下を参照のこと。

② Cf. James Barr, "Philo of Byblos and His 'Phoenician History'." *Bulletin of the John Rylands Library* 57 (1974), pp. 17-68.

③ ウガリット研究の為の参考文献を次にあげる。

〈文法書〉

Cyrus H. Gordon, *Ugaritic Textbook*. With Supplement. Roma: Pontificium Institutum Biblicum, 1965, 1967. (『文法書』(略す)第一分冊)

J. Aistleitner, *Untersuchungen zur Grammatik des Ugaritischen*. Berlin, 1954.

〈テキスト〉

UT の第一分冊 (Ug V 及び Ug VI に発表のテキスト以外は全てを合せて))

Andrée Herder (ed.), *Corpus des tablettes en cunéiformes alphabétiques découvertes à Ras Shamra-Ugarit de 1929 à 1939*, Paris: Imprimerie Nationale & Librairie Orientaliste Paul Geuthner, 1963. (『文法 CTA』(略す))
Jean Nougayrol (ed.), *Ugaritica V*. Paris: Imprimerie Nationale, 1968. (『文法 Ug V』(略す)) pp. 545-595.

〈辞書及びコンコルドランス〉

UT の第三分冊

J. Aistleitner, *Wörterbuch der ugaritischen Sprache*. Third Edition. Berlin, 1967.

Richard E. Whitaker, *A Concordance of the Ugaritic Literature*. Cambridge: Harvard University Press, 1972.

G. Douglas Young, *Concordance of Ugaritic*. Roma: Pontificium Institutum Biblicum, 1956.

〈概説〉

Cyrus H. Gordon, *Ugarit and Minoa Crete: The Bearing of Their Texts on the Origins of Western Culture*. New York: W.W. Norton, 1966.

———, *Ugaritic Literature: A Comprehensive Translation of the Poetic and Prose Texts*. Roma: Pontificium Institutum Biblicum, 1949.

J. Aistleitner, *Die mythischen und kultischen Texte aus Ras Shamra*. Budapest: Akademiai Kiado, 1959, 1964.

Godfrey R. Driver, *Canaanite Myths and Legends*. Edinburgh: T. & T. Clark, 1956.

H.L. Ginsberg, "Ugaritic Myths and Legends," in ANET, ed. by J.B.Pritchard, 1955.

A. Caquot, M. Sznycer & A. Herdner, *Textes Ugaritiques: Tome 1: Mythes et Légendes*, Paris: Lafour Maubourg, 1974.

- ③⑧ 例をばヘブレイクヤ一七・六
 ③⑨ *Ug. V*
 ③⑩ Gordon *UT*, §10. 1.
 ③⑪ ウガリト語を学ばむは、即ち上級くハノ語を学ばむは、同様にスルベシ。cf. Gordon の *Ugaritic Textbook* を参照。
 ③⑫ cf. U. Cassuto, *The Goddess Anath: Canaanite Epics of the Patriarchal Age—Texts, Hebrew Translation Commentary and Introduction*, from Hebrew by I. Abrahams, Jerusalem: Magnes Press, 1971, 1951, Chap. II “The Relationship Between Ugaritic Literature and the Bible.” also Stanley Gevirtz, *Patterns in the Early Poetry of Israel*, Chicago: University of Chicago Press, 1963.
 ③⑬ 前掲
 ③⑭ also 歳言三〇・一八参照。
 ③⑮ Cassuto (前掲書) p. 19.
 ③⑯ 同上、第二章を参照。
 ③⑰ 同上、p. 48.
 ③⑱ マニヘン書の英雄マニヘンがノブトヨブの中間に來ることは不自然である。
 ③⑲ Cyrus H. Gordon, *Ugarit and Minoa Crete* (通譯) p. 25.
 ③⑳ Yehezkel Kaufman, *The Religion of Israel*, Chicago: The University of Chicago Press, 1960, 参照。
 ㉑ *UT* 67: 1: 1-2. 参照。
 ㉒ ハの箇所をトキヤ書一七・一ハの關係でいふは、*Ras Shamra Parallels*, Vol I, pp. 33. 以下を参照。
 ㉓ cf. ‘nt: III: 36-37 及び註篇四四・一三’、*エホシヤ・ニヒトリ* の Tannin (巨鱈) の「鱈」(ym) をなぐつていふ。
 ㉔ 例をば、G. Ernest Wright, *The Old Testament Against Its Environment*, London: S.C.M. Press, 1950, p. 27 他。註篇 “Symbolism of the Sea in the Old Testament” (M. Div. thesis at Asbury Theological Seminary) 参照。
 ㉕ G. Ernest Wright, *God Who Acts*, London: S.C.M. Press, 1952 参照 (邦訳『歴史に働かれた神』も)。
 ㉖ 従って、フォン・ラートはじめ幾人かの学者の考える如く、イスラエルにとって「創造信仰は第一次的性格のもの」であると必要はなす。cf. Loren R. Fisher, “(Review of) Creation Versus Chaos, by Bernhard W. Anderson,” *Interpretation*, 23 (1969), p. 83.
 ㉗ Kaufman (前掲書) pp. 60-63. 参照。
 ㉘ 神話の定義と旧約聖書との關係に關する諸説については、Brevard S. Childs, *Myth and Reality in the Old Testament*, London: S.C.M. Press, 1962 参照。
 ㉙ W. F. オールブライト著『考古学とイスラエルの宗教』東京、日本基督教団出版局、一九七三年二〇二頁以下参照。
 ㉚ フンブとイゼベルの兩者の間の価値観の相違は、彼らがナボテのぶどう園(列王紀上二二章)に対して示した態度に現われている。ゴードン「古代オリエンツに於けるウガリトの重要性」(前掲)二〇頁以下参照。

(聖書神学會教師・筑波大学講師)